

武蔵野の境の榎

山野清二郎 (高十二回)

とが、まず考えられるであろう。それでは、何故蓮馨寺の所で武蔵野が切れるのか。この謎を解く鍵は、その北側に接する鳴町(志義町)にあり、次の御花嶋の記事が注目に値する。

御花嶋 鳴町

南側町屋の裏 今小屋敷の所也 元御用地にて千草万花を植られし故御花嶋と称す 其比ハ此所大江町の方に入口有りて鳴町の方には人口なし 松平伊豆守殿御代蓮馨寺境内築立にて南をふさぎ 草花の為よろしからすとて屋敷に被仰付 其節大江町の方の口ふさぎ 鳴町の方二入り口を付て 屋敷式間となれり (『川越素麴』)

同内容のものが、『三芳野名勝図会』にも載るが、御花嶋を塞いだものが少し違っていて、

立)の中で詠んだ

限りあればけふ分けつくす武蔵野の境もしるき河越の里の歌であろう。十五世紀末のことである。はるばると武蔵野を旅して、漸く辿り着いた河越の里のことを詠嘆したものである。

さてここで「境もしるき」とあるが、武蔵野の果ては、原野が尽き、低地に接した見晴らしのよい台地ということだけで感動を呼ぶものだったのであるか。道興は武蔵野の果て河越の里で、一体何を目にしたのであろうか。

武蔵野の境には、榎の古木があったと、川越の地誌は記す。

境の榎 蓮馨寺の前

豎門前と南門前の曲がり角二古木の榎有り 昔ハ此所まで武蔵野にて其印の木なりといふ 享保の初頃老木ゆへたをれて今はなし (『川越素麴』 他) 地誌も同内容

この記載を現在の川越の地に照らしあわせてみると、奇異の感に打たれる人が多いであろう。なぜなら蓮馨寺の北にはまだ市街地が続いていて、台地が終わるのは、志多町・宮下町辺になるのだからと思うからである。しかし、武蔵野の名残を叙した次のような記事、

大久保町 長武百二十八間三尺

昔ハ此辺都而武蔵野也しか 今ハ二里かほと南に武蔵野と云大なる原行 元米当所ハ南北地高にして 丁半至而凡七八尺斗凹なり 仍而しかいふ 霖雨霜

江戸時代の川越には、『川越素麴』『多濃武の雁』『武蔵三芳野名勝図会』等の地誌が生まれている。これらの地誌を基に、川越の古地図等を参照して、かつての川越の地を想定してみると、思いもかけない姿が浮かび上がる。以下そのあらましを述べたい。なお、ここに登場する町の名は、すべて旧町名に依っている。

*

紫匂ふ武蔵野のの歌で馴染みの「武蔵野」は、遠く万葉の時代から歌に詠まれ、以後歌枕として親しまれ、近世には漢詩の世界に、その後は各地の校歌等にもとりこまれて、今なお韻文文学の中に命脈を保っている。文学の歴史の中の「武蔵野」は、武蔵国の野原を漠然と指すのではなく、かつて国府のあった東京都府中市付近から北に伸びる武蔵野台地の原野を指した。その東北端が川越であることは、言うまでもない。

ところで、「武蔵野」がこれほど長く詩歌に歌われ続けて来ているのに、「武蔵野」と抱き合わせて詠まれる地としては、「三芳野の甲」「堀兼の井」などで、「河越」の名は現れない。歴史上、河越の地名が姿を現すのは、十二世紀に入ってからということであれば、伝統的な枠組の中で歌い継がれる歌の世界には、なかなか「河越」の名は入りこめなかつたわけで、恐らくその初出と思われるのが、道興准后が「廻国雜記」(一四八七年成



川越御城下絵図面 元禄7年 次原満氏蔵 大蓮寺保管 「町割から都市計画へ」(平成9年3月 川越市立博物館)より